
彼岸花

篠義

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼岸花

【Nコード】

N1244Q

【作者名】

篠義

【あらすじ】

関西夫夫

関西弁で、字書きはできるのか？ で、はじまった、このお話。

意味がわからない言葉があれば、連絡ください。ははははは。

台風一過で、素晴らしく秋晴れの休日だった。台風で倒れた彼岸花は、健気に起き上がって赤い花を咲かせている。絶好の洗濯日和だと、俺の旦那は朝から洗濯機を回しまくり、ただいま、干す場所がなくなって、ようやく諦めた様子だ。

ベランダは、たくさん洗濯物に占領されて、歩けるだけのスペースもない。そこから眼下へ目をやると、彼岸花がたくさん、田んぼの土手に咲いている。

「あれ、昔、毒やから触ったらあかんって言われたんや。」

「ふーん、ほんまはちゃうんやろ？ 俺、触ってたけど死んでないで。」

「本で調べたら、毒やのうてクスリやって書いてあった。まあ、あんまり効果のある薬にはならなかったらしけどな。……茎と根に毒はあるけど生で食わんとあかんらしいし、吐き気とか下痢くらいなもんやねんてさ。」

しかし、祖母は、まるで触ることで毒が回るとでも言うように、俺を戒めた。小さい頃だったから、俺も今みたいにひねくれていないくて、ちゃんと、それに従った。今でも触ったことはない。迷信ということではないが、あれは墓場に似合う花だ。毒があるから、土葬した遺体を動物が掘り出さないために植えられていた。そういう経緯があるから、彼岸花と呼ばれている。

「それ、誰に言われたん？」

「……ばあちゃん……」

「元気なんか？」

「いや、もうおらへんよ。あの人がおらへんくなって、俺は家に存在する意味がなくなったからな。」

祖母が育ててくれている間は、それなりに家族というものが俺にもあった。それがなくなって、他の血縁者との繋がりが薄いことに気付いたのだ。別に、おかしいということはないが、どうしても、馴染めなかった。家族であるための儀式のような食事なんてものも興味がなかった。育ててくれた祖母には申し訳ないが、俺には、家族という関係が育たなかったらしい。

「可愛がられてたんやな、おまえ。」

唐突に、俺の頭を撫でて、俺の旦那は、ぽつりとそう言った。

「ん？」

横に同じように立っている俺の旦那は、微笑んでいた。

「せやないか、それぐらい心配してもらたってことやろ？　ばあちゃん、目に入れても痛ないって思ってたんとちゃうか？」

「せやろか？」

「せやなかったら、おまえ、俺と、ここで暮らしてないやろ？　ちやんと人を好きになれるんは、そういう感情を誰かからもろたお陰

や。」

「……また、恥ずかしいこと言いよるで……」

そうかもしれない。少し壊れてはいるが、この旦那と暮らすことを認めたのは、俺だし、この旦那と一緒にいるのが当たり前で、ないことは考えられないようになっていく。その感情は、親の遺伝子なんかでなくて、おそらく育ててくれた祖母に与えられたものだ。

気持ちの良い風が吹いて、眼下の彼岸花が揺れている。今は、知識があつて、それが毒でないことを知っている。だが、知らない時は、それを信じていた。それは、祖母に絶対の信頼があつたからだ。

「ええ風やな？」

「せやな。買い物行かんでええんか？」

「たまには外食せーへんか？」

「俺は別にかまへんけど……片道二時間とかは、いややからな。」

「そこまで行けへん。」

「ほんなら、一時間か？」

「まあ、そんなとこやな。夕方、洗濯物取り込むまで待ってくれ。」

ハタハタと風ではためいている洗濯物は、まもなく乾くだろう。今日は、秋分の日で、彼岸だったかと気付いた。

「墓参りとかええんか？」

旦那も気付いたのか、そう言い出した。

「……覚えてない……」

俺の生家の墓は、近所にあるのだが、もう二十年以上行ったことがないから正確な場所がわからない。それに、あそこにあるのは、ただの骨だ。あそこに祖母がいるわけではない。

「ばあちゃん、どんな人？」

「普通。」

「……それ、人の評価として、どーなん？」

「普通に、ごはん作って、普通に、朝起こしてくれて、普通に、「おかえり」って迎えてくれたから、普通や。」

「俺かてやってるやんけ？」

普段、旦那が俺を叩き起こし、食事の用意をして、「おかえり」と、出迎えてくれる。ただし、決定的に違うところがある。

「おまえ、俺を嫁にした段階で、普通やないやろ？」

「あー確かに、一般的ではあらへんわな。ははははは……しやないやろ、おまえ、俺の理想の嫁やったんやからさ。性別うつかりしただけやんけ。」

からからと旦那は笑って、奥へ入った。それを見送って、また、眼下へ目をやる。ひとつ、旦那には言えないが、俺は、この花が好きな理由がある。たまたま調べて知った花言葉に、俺は、ちよつと笑った。忌み嫌われる花なのに、そんな健気な言葉が載せられているのが、とてもおかしいと思ったからだ。たぶん、一生言うことはないだろうが、俺が秋に死んだら、あの花を棺おけ一杯に入れて欲しいと頼みたい。

・

花言葉は、「想うのはあなた一人」と「また会う日を楽しみに」だからだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1244q/>

彼岸花

2011年1月15日20時45分発行